

[共同研究：インドネシアとの文化的交流を深めるための総合的研究]

## スンバで家を建てること

——インドネシアとの文化的交流を深めるためのプロジェクト報告（1）——

小 池 誠

### はじめに

本報告では、2007年度から筆者が中心になって進めてきたインドネシア・スンバ島の慣習家屋再建プロジェクトの概要を時系列に沿って明らかにしたい。2007年6月22日に竹中大工道具館で筆者が発表したスンバの家屋に関する報告が一つのきっかけとなって、筆者と国立民族学博物館の佐藤浩司氏および竹中大工道具館の西山マルセーロ氏が協力して、このプロジェクトを進めることになった。これは2007年が準備段階であり、2007年度末から国立民族学博物館と竹中大工道具館との共同プロジェクトとして本格的にスンバ島のウंगा村で家屋再建の援助とその記録化を進め、2009年度には映像記録の編集作業を進めた。3年度に渡る活動であったので、1回の報告でプロジェクトの全容を伝えるのが難しく、2回に分けて報告したい。最初の報告では、このプロジェクトが始まった経緯から2008年9月までの段階を取り上げたい。また、今回のような地域社会への援助に伴ってしばしば生じる問題点についても触れたい。

スンバの慣習家屋再建は、総合研究所・地域社会連携研究プロジェクト「インドネシアとの文化的交流を深めるための総合的研究」の一環として実施してきた活動である。この地域社会連携研究プロジェクトは、これまでインドネシアに関心をもつ本学教員が実施してきた共同研究プロジェクト、「インドネシアの総合的研究」および「インドネシアにおける開発と社会変容」、「インドネシアにおける開発と停滞」、「インドネシアにおける地域社会の変容」を発展的に継承するものである。すなわちインドネシアの社会と文化に対して総合的な視点でアプローチすることを目指している。2007年度からスタートした地域社会連携研究プロジェクトは、本学教職員と学生によるインドネシアとの文化的交流をより深化させるために必要となる基礎的な段階と位置づけている。本研究の特色は、これまでの研究プロジェクトと違って、インドネシアに対する学問的な研究を進めるだけでなく、日本とインドネシアとの文化的交流をさらに深化させるための実践的な試みも視野に入れていることである。その実践の一つとして、筆者が1985年以来長く関わっているインドネシア・スンバ島のウंगा村に

おける慣習家屋再建を援助することとなった。

2006年度に20周年を迎えた国際ワークキャンプは、様々な形でバリ島・ブリンビンサリの児童擁護施設の改善に努め、桃山学院大学、ひいては日本とインドネシアとの交流を進める上で大きな実績を上げてきた。また、2005年度からはスラバヤのペトラ・キリスト教大学との交流もスタートし、本学とインドネシアとの友好的な関係はますます緊密なものとなっている。ワークキャンプに参加した学生のなかには、バリの子どもたちを通してインドネシアに対する関心を強め、ペトラ・キリスト教大学に1年間の長期留学に赴き、インドネシアの文化と社会に対する理解をさらに深めるというケースが増えている。

今回報告する、この再建プロジェクトは、上記のような従来の本学の活動とは違った方向性からインドネシアとの文化的交流を深めるとともに、文化面でのインドネシアに対する援助に貢献したいという目的で始めた。スンバ島は絣織りや慣習家屋、支石墓など独自の地方文化をもっているが、同時にインドネシアのなかでも経済的に貧しい地域としても知られている島である。スンバのなかでもとくにウンガ村は貧しい村であり（村の概要については次節で紹介する）、多くの村民が貧困に苦しんでいる。その結果、慣習家屋、とくに儀礼の中心ではあるが、再建されないまま長い年月が過ぎている「ラトゥの家」を村民が自力で建築するのは困難である。援助という形であっても、「ラトゥの家」の再建を今回進めない、建築に関わる知識と技術、また家屋の建築に伴う様々な慣習と儀礼歌は永久に消えてしまう可能性が強い。日本の神社建築の例で言えば、式年遷宮として伊勢神宮が20年ごとに建て替えられるのは、建築様式の伝承にとって20年という間隔が大きな節目となっているのが、その理由の一つであろう。「ラトゥの家」の改修作業が最後に行われたのは1986年〔小池2005：184-190〕のことであるから、その後まったく手が加えられないまま朽ち果ててしまったことになる。一つの家屋に留まらず、それに関連する貴重な文化が消滅するという危機感をもって、今回、スンバの地域文化振興を目的とするプロジェクトを始めることとなったのである<sup>1)</sup>。インドネシアのなかには、各民族に独自の慣習家屋（インドネシア語で rumah adat）の様式が伝えられているが、スンバ、とくにウンガは釘など近代的な工具を使わずに、従来と同じ建築技術をそのまま維持している珍しい地域である<sup>2)</sup>。また、家屋の建築とそれに付随して執行される様々な儀礼を映像記録に留めておくことは、現地の人間にとっても大きな意味がある。また日本とはまったく異なる意味をもつ家屋の在り方とその建て方を映像記録を通して知ることは、インドネシアの文化をより理解する上で、日本においても意義深いことだと考える。

1) 慣習家屋再建の意義については、2007年12月17日にプロジェクトの研究会で、「スンバで家を立てること——地域文化振興にむけて」という題で発表した。

2) インドネシアの民族建築に関する第一人者である佐藤浩司氏（国立民族学博物館）による。

## 1 スンバの家屋

### 1-1 中核村ウンガとマラブ

再建プロジェクトの内容に入る前に、その背景として、対象となったウンガ村の概要を紹介しよう。ウンガ村は東スンバ島の県庁所在地ワインガプ（Waingapu）からは、自動車でも西に向かい、2時間近くかかる。ここで取り上げる民族誌的資料は、ウンガ村を含む東スンバ島ハハル郡（当時はハハル分郡）で1985～1988年にかけて実施した社会人類学的調査<sup>3)</sup>およびその後の数回に及ぶ補足調査で得られたものである。筆者がスンバを調査地として選んだ最大の理由は、レヴィ＝ストロースの研究で有名な一般交換<sup>4)</sup>とマラブ（祖先、祖霊）を対象とする祖先祭祀が日常生活のなかで生き続けているからであった。とくにスンバ人の祖先が到達したと神話で語られるハハル岬（インドネシア語ではササル岬）から10kmほど離れた山の中腹に位置する中核村ウンガ（Parai Wunga）では、年に2回（収穫前と収穫後）、各慣習家屋で儀礼が執行され、マラブへ供犠が捧げられた。マラブへの信仰が廃れていない点で、中核村ウンガを中心とするウンガ村（Desa Wunga）は東スンバ島でも珍しい村であった。

表1 ウンガ村とナブ村の人口と面積（1988年と2004年）

	ウンガ村		ナブ村	合計	ハハル分郡
1988年面積 (km <sup>2</sup> )	45.9		142.4	188.3	944.1
1988年人口 (人)	1031		713	1744	7976
1988年人口密度 (人/km <sup>2</sup> )	22.46		5.01	9.26	8.45
行政単位の変更後	カダハン村	ウンガ村			ハハル郡
2004年面積 (km <sup>2</sup> )	23.5	22.4	142.6	188.5	846.7
2004年人口 (人)	656	788	674	2118	12227
2004年人口密度 (人/km <sup>2</sup> )	27.91	35.18	4.73	11.24	14.44

[Kantor Statistik Kab. Sumba Timur 1989: 10, 28; Badan Pusat Statistik Kab. Sumba Timur 2005: 27]

どの程度マラブに対する信仰（インドネシア語ではマラブ教 Agama Marapu と呼ばれる）が存続しているかは、スンバ島のなかでも地域によって異なる。カダハン村とウンガ村（旧ウンガ村が2村に分かれた）では、2004年の時点で81.1%が伝統宗教の信者と記録されている [Badan Pusat Statistik Kab. Sumba Timur 2005: 65]。しかし、スンバ全体では、近代化の具体的な現われとしてキリスト教に改宗する住民が年々増加している。その結果、統計上

3) この調査で得られたデータを使って、筆者は東京都立大学に提出した学位論文「東インドネシアの家社会——スンバの親族と儀礼」を執筆し、それを後に同名の単著 [小池2005] として公刊した。

4) 一般交換では、A→B→Cというように、妻の与え手と妻の受け手の間で非対称的な女性の交換がおこなわれる。男性は母方オジの娘（母方交叉イトコ）と結婚するのが理想とされる。ただし、それだと結婚の範囲が極端に狭いことになるので、実際には「母方オジの娘」と同じ親族名称で呼ばれる広い範囲の女性（たとえば母方のマタイトコなど）が結婚の対象となる。

1986年に東スンバ島の人口の37.6%を占めていた伝統宗教の信者（「その他の信仰」、一般にマラブ教徒）は、2002年には17.5%に減少している [Kantor Statistik Kab. Sumba Timur 1987: 68; Badan Pusat Statistik Kab. Sumba Timur 2003: 164]。

インドネシアなかでもスンバ島がある東ヌサ・トゥンガラ州は開発が遅れ、貧困が問題となっている州である。一つの指標として教育水準を取り上げれば、2005年の国勢調査によると、5歳以上の州人口の中で小学校卒以上の学歴を有する人の割合は、50.1%しかいない [Sub Direktorat Statistik Demografi 2006b: 58]。インドネシアの他の州、例えば西ジャワ州では66.3% [Sub Direktorat Statistik Demografi 2006a: 58] に達しているのと比べると、教育水準の差は歴然としている。さらに東ヌサ・トゥンガラ州のなかでもスンバ島、とくに東スンバ県は、社会経済的に遅れた地域であり、小学校卒以上の学歴を有する人の割合は、わずかに41.0%である [Sub Direktorat Statistik Demografi 2006b: 58]。

東スンバは乾燥した気候と農業に適さない土地が広がっていて、灌漑設備の整った一部の地域を除けば、雨水に頼る農業で米の生産性は低い。米の不足を補う主食としてトウモロコシとキャッサバが広く栽培されている。また、草原を利用した牧畜が盛んで、馬と牛が飼育されている。表1に調査地域の人口と面積を示している。中核村ウंगाを祭祀の中心とする地域社会は、最初の調査の時点で行政上はウंगा村とナプ村から構成されていた。後にウंगा村は、カダハン川流域を中心とするカダハン村と、中核村ウंगाがあるウंगा村に分かれた。2004年の時点の3つの行政村の人口密度は11.24人/km<sup>2</sup> となっていて [Badan Pusat Statistik Kab. Sumba Timur 2005: 27]、インドネシアのなかでも低い数字である。この人口密度は、この地域の生産性の低さを示す一つの指標といえる。

## 1-2 慣習家屋と中核村

スンバの慣習家屋は高床式の寄せ棟の中央部が高く突き出した独特な屋根の形態でよく知られている。屋根はチガヤ葺きである。このような家屋は慣習に則って、儀礼を伴い一定の様式で建築されていて、内部空間の分割形式およびその利用も慣習によって厳密に定められている。近年、建築材の変化は認められるが、柱の組み立てで釘などの金属がいっさい使用されずに建てられる。このような家屋はもちろん実際に人間が住んで生活するための空間であるが、同時にマラブ（祖先、祖霊）が祀られている儀礼的空間でもあり、「マラブの家」（*uma marapu*）と呼ばれる。「マラブの家」に多くの親族が集まって、祖先祭祀だけでなく婚姻や葬礼などの人生儀礼を執り行う。スンバ社会において「マラブの家」は祭祀の場、つまり「社」という性格が強いのである。一方、インドネシアのどこにでもあるような「近代的」な家屋がスンバでも広まり、高床式でなく地床式で、トタン屋根の家屋が増えている。社会的生活と儀礼において重要性をもつ「マラブの家」と普段の生活の舞台となる家屋が明確に分かれているのが、スンバの住居様式の最大の特徴である。

「マラブの家」という名称が示すように、家屋にはマラブ、つまり祖霊が祀られている。

屋根裏のなかで、炉の真上にあたる部分は「マラブの棚」と呼ばれ、そこには祖霊が宿ると信じられている金・銀のペンダント（これもマラブと呼ばれる）と金属片（カワダク）など先祖伝来の神器が籠に入れて、保管されている。「マラブの棚」にはこのほか、供犠で使用される皿（中国の陶磁器）などが置かれている。スンバの世界観では、床上の部分が人間の生活空間であるのに対し、屋根裏の部分は祖霊のための聖なる空間となっている。儀礼の時以外、特別な理由がなく住人が屋根裏に登ることは禁じられている。

「マラブの家」はどこに建ててもいい家屋ではない。おもに中核村 (*paraingu*) という、日本の村落とはまったく異なった性格の村に建っている。中核村とは政治的な領域（これもスンバ語で *paraingu* という）の中心となる村落である。中核村ウंगाには、1986年当時には13棟の「マラブの家」が建っていた。スンバ島はオランダの植民地支配が確立する20世紀初頭以前には、自律性をもったいくつもの領域に分かれていた。これは、首長が率いるクニ（国）と呼べるような政治的単位である。インドネシアの現在の行政単位で考えると、3～4位の行政村が合わさって、一つのクニを形成していたことになる。領域内に住んでいる父系の親族集団、すなわち氏族 (*kabihu*) またはその下位単位が、それぞれの祖先祭祀の場として「マラブの家」を中核村の内部にもっている。中核村はクニの地理的・社会的・祭祀的な中心をなす村なのである。

中核村は、オランダ統治が確立する以前に頻発していたクニ同士の戦いに備えて、高台など要害堅固の地に建てられていた。耕地や川から離れていて、中核村は居住環境の点ではまったく適していない立地条件にある。雨季で農作業に忙しい時、村人は領域内の分村や農耕地の近くの小屋で生活している。中核村と違って、分村は周囲に耕地をもち、じっさいの生活の場となる集落である。農繁期に中核村か耕地の近くで生活していた村民が、乾季になって中核村単位の儀礼が執行されるようになると、中核村に集まって、しばらくそこで暮らすという二重生活のパターンをしていた。

植民地時代からすでに中核村を放棄し、生活に便利な地域に移住するプロセスが始まり、現在の東スンバでは多くの中核村が消えている。すでに説明したように、キリスト教に改宗するスンバ人が増えていき、中核村の存在基盤である祖先祭祀自体が消えつつある。

## 2 「ラトゥの家」の建築に向けて

### 2-1 「ラトゥの家」と「マカテンバの家」

今回のプロジェクトの目的は中核村ウंगाに「ラトゥの家」を建築することであった。しかし、下を書くような事情で「ラトゥの家」の建築は延期となり、2008年3月にまず「マカテンバの家」を建築することが決まった。

最初にこの二つの家屋の特徴を説明しよう [小池2005: 97-102]。「ラトゥの家」(Uma Ratu) は中核村ウंगाの祭祀上の中心となる家屋である。4年に一度執行される大祭 (*mangajingu*) において、中核村を構成する「マラブの家」の代表者達が「ラトゥの家」に

集まって、中核村全体の安寧と豊穰を祈って儀礼を執行する。ラトゥ (*ratu*) とは、中核村単位の儀礼の執行に際して、指導的役割を果たす祭司の意味である (実際に、マラブに対して祈願をするのは別の宗教職能者)。この家屋は、中核村ウंगा内の他の家屋より大きいだけでなく、独自の特徴をもっている。他の家屋の柱は地面に直接立てられているのに対し、「ラトゥの家」を支える4本の支柱は石組みの上に立てられている。また、高く突き出た屋根の頂点には2本の棟飾り (*kadu uma*) が設置されている。棟飾りは中核村ウंगाでこの家屋にだけ許されている特権である。儀礼の時を除いて、「ラトゥの家」の成員 (一つの氏族を成している) 以外がこの家屋に入ることはかたく禁止されている。

「ラトゥの家」に祀られているマラブは、天から最初にスンバに降り立った神話上の人物であり、中核村ウंगाの創建者でもあるウンブ・ワル・ハハル (*Umbu Walu Haharu*) である。屋根裏にはホンバ・ラコーカ (*Homba Lakoka*) という純金製の牛の角の形をした容器と金製の装飾品が保管されていた<sup>5)</sup>。これらの神器が<ラトゥの家>のマラブと呼ばれ、中核村ウंगा内の神器のなかで聖性がもっとも高いものとみなされていた。

「ラトゥの家」に次いで儀礼上重要な役割を果たすのが「マカテンバの家」 (*Uma Makatempa*) である。マカテンバ (*makatempa*) というのは「集める」という意味で、中核村での儀礼においてこの慣習家屋が儀礼に使う米などの物資の再分配センターになると説明される。この家屋は「ラトゥの家」での儀礼に先立ち、その手順を定める協議 (*batangu*) や占い (*pui mowalu*) が行われる場である。中核村の祭祀面のリーダーとみなされるラトゥはこの「マカテンバの家」の成員から選ばれる。2人のラトゥのうちラトゥ・ハラーク (*ratu halaku*, 「動くラトゥ」) が一般にラトゥと呼ばれ、「ラトゥの家」での儀礼の執行に際して大きな発言権を持ち、大祭においてラトゥしか歌うことが許されない儀礼歌を歌う。

「マカテンバの家」はアナ・マアル氏族の「家」である。この氏族のマラブはウンブ・ワル・ハハルの三男であるウンブ・コフ (*Umbu Kohu*) であり、アナ・マアル氏族は、その兄であるウンブ・ワチュ (*Umbu Wacu*) をマラブとするトゥラ・パライング氏族とともに貴族層 (*maràmba*) に属している。アナ・マアル氏族は自己の村であるナブを基盤にして大きな力を有していた。オランダ統治時代に中核村ウंगाを含む地域全体はナブとして知られ、アナ・マアル氏族の長はラジャ・ナブ (ナブ首長) として大きな勢力を誇っていた。

## 2-2 2008年2月の予備調査

2008年2月から3月にかけて筆者は2度インドネシアを訪問し、再建プロジェクトの準備段階として調査を実施した。最初の訪問では、スンバ島において現地関係者と話し合い (2008年2月27日)、「ラトゥの家」を2008年中に建てるためのスケジュールとそれに関わる費用などについて話し合った。この会合には今回のプロジェクトの連絡役を務めていたウン

5) これらの重要な神器は1986年5月に盗難にあい、これが同年実施された大祭の執行に大きな影を落とすこととなった。

ガ村出身の公務員W氏<sup>6)</sup>の他に、ウंगाのおもだった慣習専門家（インドネシア語で tokoh adat）が参加した。ウंगाの村長は都合で欠席していたので、最終的な日程は村長の同意を得て決定することとなった。

話し合いでの確認事項は以下の通りである。

「ラトゥの家」の再建のためには、その前に「マカテンバの家」を立て直す必要がある。「マカテンバの家」は儀礼的に見て、「ラトゥの家」に次ぐ格の高い家屋であり、「ラトゥの家」の建築の際には協議の場となる家屋である。「マカテンバの家」の現状は、チガヤが傷んで、柱も傾いていて、全く協議には使えない。主柱は代える必要がないが、一度壊してから、立て直す必要がある。先ず「マカテンバの家」が再建されてなくては、主柱の切り出しも含めて、「ラトゥの家」の建築のための一切のプロセスを始めることができない。

そのため、3月末に森に入って「ラトゥの家」用の主柱の伐採を始めることは不可能である。「マカテンバの家」の修復を優先しなければいけない。年内に「ラトゥの家」の建築を完了するための最短のスケジュールとしては、3月末に「マカテンバの家」を再建し、その後、協議を開始し、5月か6月に森に入って、主柱の切り出しと村への運搬の行事をすることになる。その後、主柱に彫刻を施し、9月後半の「ラトゥの家」の建築に備えることになる。

ただし、3月中に「マカテンバの家」を再建する計画にも二つの難点がある。そのチガヤを茸くためには、生えているチガヤ（3月では伸びてなく6月以降にならないと使い物にならない）を使うのではなく、すでに刈り取って束に括っているチガヤを探して買い取る必要がある。隣村で家の建築が遅れて、余っているチガヤがあるという情報も伝わっている。これを使えるとする、3月末に「マカテンバの家」を建て直す様子を筆者と竹中大道具館の西山氏が立ち会うことはできる（筆者は授業の関係上、何としてでも3月中に作業を始めることを主張した）。また、建築のためには、主柱以外の木材や、柱を縛るためのツタなどの建築材料を探すために、森に入る必要もある。これを調査することは十分に資料的な価値あることである。もう一つの難点は、3月末には村落の開発に関わる行事が予定されていることである。

W氏はすでに数人の古老と会って、「ラトゥの家」と「マカテンバの家」の再建のための工程表とそれぞれの見積もりを書き上げていた。それによると、総予算は約9600万ルピア（日本円に直すと当時のレートで約117万円）となっている。もちろん日本側がこの全額を負担することはありえないが、これは当初の日本側の見込みをはるかに超える額であった。もちろん最終決定ではなく、粗い見積もりなので、交渉を通して減額することは可能な額である。

この事前調査の結果、このプロジェクトを進めていく上でのいくつかの問題点が浮かび上

6) W氏は40歳代の男性で高校卒の学歴をもっている。ウंगा村では、高校を卒業したものは少数であり、彼はインドネシア語の読み書きに優れた人物とみなされている。

がってきた。訪問前に日本とスンバで連絡を取るため、東スンバ県の県庁所在地ワインガブ在住の NGO 活動家M氏を介して、ウンガ村の連絡役W氏にこちら側の希望を伝えていた。そのため、筆者としては、日本側の希望が十分にウンガ側に伝わっていると思い込んでいた。しかし実際に2月にW氏などと話してみると、彼らが日本側の注文をそれほど真剣に考慮していなかったことが判明した。さらに計画が具体的になればなるほど、ウンガ村の村長を始め、慣習専門家たちは、色々な点から注文を出してくるようになった。筆者としては、2007年にウンガ村長に会って、このプロジェクトの概要を伝えた時には、多少は無理を通せるという感触を得た。しかし、2008年2月の時点では、日程面での日本側の都合と、ウンガ側の慣習との間で、どの程度折り合いをつけることができるかという問題は、簡単には解決できないという現実直面せざるを得なくなった。

### 2-3 「マカテンバの家」の建築

前節で述べたような点が危惧されたが、最終的には日本側の希望通り、3月下旬に「マカテンバの家」の建築を始めるという連絡がスンバからあり、調査に赴くことになった。3月22日から29日までスンバに滞在し、慣習家屋再建計画のパートナーである竹中大工道具館の研究スタッフである西山氏とともに慣習家屋（マカテンバの家）の建築の主要工程に立会い、その調査を行うこととなった。以下、日誌に従い、建築の概要を報告する。

#### 3月23日（日）

ウンガの村長宅で村長、R氏（ウンガにおける建築計画のリーダー）、W氏のほか、村の慣習専門家が集まり、「ラトゥの家」の建築までのスケジュールが決まった。また、R氏が「ラトゥの家」再建委員会の長に就き、またW氏が会計役を務めて、日本側からの援助金を管理することになった（これが後に大きな問題となった）。

「マカテンバの家」の建築完了後、ウンガ村、ナブ村の関係者だけでなく、中核村ウンガを起源の地とするマンボロ（西スンバ県）とラカワチュ、カナタンの慣習首長（ラジャ）も招いて、4月に「大会議」を開き、「ラトゥの家」の建築儀礼に必要な儀礼的役職者を定める。続いて、6月に森に入って、4本の主柱の伐り出しと木曳を行い、8月には建築に必要なその他の木材の準備などを進め、9月末から建築を始めるという日程が決まった。建築作業は、6月、8月など偶数月に行うのが慣習上良いとされるが、日本側の要望を考慮して、9月末に建築作業を始めることとなった。

#### 3月24日（月）

中核村ウンガの裏山にある森に入って、すでに伐採してあった木材を運ぶ方法について調査した。伐採した木材はその日のうちに中核村まで運ばれた。うち1本の木材は9人の男性による木曳で運ばれ、銅鑼と太鼓の音に迎えられて、中核村の中に入っていった。持ち上げて運ぶのではなく、木曳が慣習上、望ましいやり方である。

「ルンブ・ウーラングの家」の「大きなカハル」(*kahalu bākulu*、家屋の右側の部分で、

男性のための公的かつ儀礼的な空間)で、建築作業が順調に進むことを祈願して儀礼が執行され、鶏と豚が供犠された。この家屋をもつルンブ・ウーラング氏族は、ワイ・モール氏族とともに、「冷たくする力」(儀礼的に危険な熱い状態を冷やす力)をもち、「ラトゥの家」と「マカテンバの家」の建築に責任をもっている。建築計画のリーダーであるR氏もこの「家」の有力成員である。このように、ウंगाでは中核村を構成する「家」ごとに役割が決まっている。

家畜の肉が調理された後、祈願者は肉とご飯を前において、マラブに「食べろ！」という文句で始める祈りを捧げた。その後、集まった参加者(約50人)にご飯と豚肉料理がふるまわれた。建築で様々な工程で執り行われる儀礼は、マラブに供え物をささげて無事に家が建つように祈願すると同時に、働き手として集まった村人に食事を提供する機会ともなる。ウंगाでは慣習家屋の建築は、中核村ウंगाの構成員による協同作業で進められる。作業参加者に対して金銭が報酬として支払われることはなく、食事とシリー・ピナン(スンバではピンロウジュとキンマの実、石灰を混ぜて噛む習慣がある)、コーヒーなどの嗜好品が提供されるだけである。

夕方、「マカテンバの家」の前に村人が集まって、今後の作業について話し合いがあった。

### 3月25日(火)

昨日に続いて森に入り、西山氏が伐採の様子を撮影した。中核村の中では、村人が柱に彫刻を施していた。手先の器用な村人が墨を使って、大雑把に線を引き、それに合わせて、他の人がチョウナ、山刀、ノミなどを使って、木材に切り込みを入れていった。

16:45から「マカテンバの家」の解体を始め、1時間位で作業は完了した。4本の支柱は傷んでいないので、そのまま使うことになった。ただしロープで支柱を引っ張って、斜めになっていたのを直立させた。その後、西山氏が支柱の間隔と対角線の長さを計測したら、30cm間隔がずれていることが判明した。作業中、村人たちは目で見ても、柱のずれを気にしていたが、それが数字で証明されたことになる(翌日少し気持ちだけ動かして建築作業を続行した)。

夜、解体された「マカテンバの家」と、「ルンブ・ウーラングの家」で、翌朝の建築が滞りなく進むことを願って儀礼が執行された。最初に、「マカテンバの家」の前面右の支柱(占いの支柱)の所で5人が参加して、鶏1羽のみを供犠して祈願が行われた。続いて、「ルンブ・ウーラングの家」の「大きなカハル」で豚1頭を供犠して儀礼を執行した。

### 3月26日(水)

朝6時から「マカテンバの家」の建築が10人ほどの働き手で始められた。最初に屋根裏の部分から建築作業を進めた。昼に、前面右の支柱で昨晚に続いて儀礼が執行された。男性が大きな豚をナイフで刺して殺した後、太鼓が叩かれ、踊り始めた。続いて、他の男性も踊りに加わった。このように踊りで家屋の建築を祝うのである。その後、夕方まで柱を組み立てる作業が続けられた。一方、中核村の下に置かれていたチガヤが運び入れられ、チガヤを葺

く準備も進められた。

### 3月27日（木）

7時半頃から作業を始め、屋根の部分の骨組みの調整を行う。昨日縛った木材を解いて縛りなおし、後部のひさしの木材の先を揃えた。その後、前面と後面同時にチガヤを葺く作業を始めた。全体で30人くらいが仕事に従事していた。11:30には前面と後面のカヤ葺きがほぼ完成した。午後、両側面のひさしを支える柱が不足していたので、「ルンプ・ウーラングの家」の軒下に置いてある「ラトゥの家」の残り材を使うことになった。「ラトゥの家」のものは、「ルンプ・ウーラングの家」の権利になっているから、この「家」が許せば、使用することができる。「ラトゥの家」の柱は、1952年に伐採（建築は翌年）しているが、50年以上の年月が経っても、こんなに傷んでいなくて、赤い硬い材質を保っていることは、ナチュ（*nacu*, カキ科の一種）の材質の良さを示していると、ある村人は語っていた。

「マカテンバの家」はまだ未完成であったが、この日でいちおう建築作業は終わり、筆者と西山氏はウンガを離れた。28日はワインガプの東部にあるプレリウ（Prailiu）における建築技術について調査する予定であった。出発する前に、W氏とR氏と今後の日程について相談した。6月に筆者がスンバを再訪するまでに、作業の日程と、参加者、経費をまとめた報告書を書いてもらうように二人に依頼した。この時点では、主柱に使うナチュの伐採は5月に実施し、6月に木曳する計画であった。

## 2-4 ウンガの建築技術

同行した建築史の専門家である西山氏の見立てでは、ウンガの建築技術は高くないという。水平に糸を張ることをしないので、点と点で計る水平・垂直の関係ができてなく（日本の農家では、曲がった木を使っている、その点はきちんとできている）、その結果、家屋が不安定な構造になっている。また、土地の水の流れをみていないので、柱が水分で朽ちやすくなるのも当然という意見であった。筆者としては、中核村ウンガでは前と同じ場所に家を建てることを前提にしている以上、「マカテンバの家」の位置の悪さは仕方ないと考えている。実際1986年に「マカテンバの家」を建て、その後東スンバ県観光局の援助で修理しても、直ぐにひどい状態になってしまう。この家屋をもつアナ・マアル氏族の多くの多くはナブ村に住んでいて、めったに中核村ウンガに来ないし、「マカテンバの家」に住む人を決めてなく、無人になっているのも、家屋の傷みが早い理由の一つである。スンバのようなチガヤ葺きの家屋は、人が住み、家の中心にある炉で煮炊きすることによって、長持ちするのである。

さらに西山氏によると、木材のはつり方にしても、木をみていないので、時々反対の方向にはつって、むやみに木を削るだけになっている。また、ツタ（*nggai*）で木材を縛るのにせよ、縛り方が下手なので、ツタの強さだけに頼っていて、すぐ切れてしまうと言っていた。筆者としては、建築技術は単純にせよ、ウンガ周囲の環境に適合したローカルな建築知識があることを信じたいが、西山氏は多少否定的であった。ただし、「トゥラ・パライングの家」

(Uma Tula Paraingu)などは築年（一説ではオランダ統治時代）からかなり経っていても柱の構造はしっかりとしているし、ウंगाにローカルな知識がなかったのではなく、それがうまく継承されていないと考えるべきであろう。

### 3 「ラトゥの家」建築の困難さ

#### 3-1 7月のウंगा訪問

2008年7月20～21日に筆者は「ラトゥの家」の建築日程について確認するために、スンバに赴いた。まずウंगाに着いて最初に目にしたのは、3月27日に筆者がウंगाを離れてから、まったく作業が進んでいない「マカテンバの家」の状態であった。7月30日に「ラトゥの家」再建委員会の会計兼日本との連絡役を務めているW氏は、筆者の質問に対してその理由を以下のように説明した。

「マカテンバの家」がいちおう建ってから、4日間作業を休んだが、その後、再建委員会の長R氏の父親の病気や、その後、色々な出来事が起きた結果、結局何も作業は進んでいない。父親は肝臓ガンで県都ワインガプの病院に入院していたが、もう絶望ということでウंगाに戻っていて、結局7月19日に亡くなった。故人は、「ラトゥの家」の建築に大きな役割を果たすべき「ルンプ・ウーラングの家」の長で、この村の長老の一人であった。

また6月はR氏の家族とW氏が共通の親族の葬式のため、ナプ村内の集落に行っていて何もできなかった。色々な問題が生じて埋葬が延期され、1ヶ月もの間ウंगाからの一行は、村を離れることとなった。さらに、ウंगा村長の甥がバイクに乗っていて倒れ怪我をしたため、村長は何度もワインガプに行く羽目になり、「マカテンバの家」の建築作業は手付かずのまま放置される結果となった。

さらに不幸は続き、筆者が滞在中の7月21日早朝、「ボーフの家」（「ルンプ・ウーラングの家」の背後に建つ家屋）の長であり、かつては最も影響力のあった長老が亡くなった。彼の弟が、3月の建築で大きな役割を果たした男性である。「マカテンバの家」を建てたのに、中途半端なまま放っておいたため、死者が続いたということが村人の間で噂された。また、日本からの援助金の使い方など不明朗なために、こういう結果になったのだという災因論も村人から語られた。それを決定付けたのは、この日の儀礼で供犠された豚の肝臓と鶏の十二指腸に悪い兆候<sup>7)</sup>が出ていたことである。日本人にとっては、天寿を全うした高齢者の死だが、スンバの土着宗教（祖先崇拜）では、すべての死には原因があり、必ずその災因が占いで探られる。さらに再建委員会の中にキリスト教徒のW氏が加わっていて、「マカテンバの家」の建築にまつわるマラブ（祖霊）の怒りは、キリスト教徒のW氏でなく、すべて「マラブの信者」を襲ってくるという因果関係のある男性が口にした。また、相次ぐ長老の死によって、神経質になった村人がお金の使い道を再建委員会の関係者に聞いても、会計役のW

7) 儀礼で供犠した豚の肝臓と鶏の十二指腸は調べられ、マラブが祈願を受入れたかどうか占われる。また、豚の肝臓からはこの世界の様々な事象を読み取ることができると信じられている。

氏以外は誰も知らないというので、会計が不透明だという疑惑が生じている<sup>8)</sup>。そういう現実的な経済上の問題と、高齢者の死という本来は結びつかないような問題が災因論の次元で結びついてしまったというのが、問題を複雑にした。

「マカテンバの家」の建築と資金に関して疑念が渦巻いているので、ナプの村民も加わって、おもだった人々の間で話し合いが開かれることとなった。最初に筆者が覚悟を決めて、インドネシア語で演説をすることになった。その要旨は以下の通りである。

「ラトゥの家」は中核村ウンガの繁栄と一体感のシンボルである。それこそ「ラトゥの家」の建築を援助をしようとした私たち日本側の願いでもある。ここで「ラトゥの家」を再建して、村人の統合を取り戻してもらいたいと願っている。そのためには、これまでの疑念を捨てる必要がある。もちろん会計役のW氏のやり方は透明性という点で問題があった。しかし、彼一人を責めるのではなく、みんなで協力して、これからも「ラトゥの家」の建築に向かってもらいたい。今必要なのは、疑いあうことではなく、お互いに協力して「マカテンバの家」を完成させ、さらに「ラトゥの家」の建築に取り組むことである。

その後、おもだった村人が意見を述べ、最終的な結論は次のようになった。再建委員会の内部でお金の使途はきちんと調べる。そして、2人の長老の葬送儀礼の完了を待たずに、「マカテンバの家」を完成させる。その後、再建委員会を組織し直して、今後は透明性に注意して会計報告をするようにする。そして、もう一度「ラトゥの家」の建築の準備を進める。当初の予定の9月末では準備期間が足りないので予定を変更し、10月の最終週を目処に「ラトゥの家」を完成させるように努める。

筆者の考えでも、これまでのお金の使途をまったく会計帳に記録せずに、お金をすべて自分で管理したW氏の責任は重大である。さらに自分が責められることを感じて、21日の夕方、中核村に姿を見せなかったのも彼に対する疑いを増す結果となった。彼の非は大きい。もちろん彼を信頼して任せていた筆者の判断ミスもある。いちおう「ラトゥの家」の建築に村人が協力して向かうことが決まったが、今後どうなるかは予断を許さない状況であった。3月の段階よりも、「ラトゥの家」の建築をめぐる状況はさらに悪い方向に進んでいる。とはいえ、国立民族学博物館の委託で撮影を担当するエスバの計画では、10月中に何としてでも撮影を完了させなくてはいけないので、これまで以上にスンバ側との連絡を取って、10月の「ラトゥの家」建築を実現させなくてはいけないと、この時点で考えていた。

### 3-2 「ラトゥの家」から「大きな家」へ

10月に予定している「ラトゥの家」建築は実現可能か、また不可能な場合、撮影対象となる家屋の建築は可能かという課題を解決するために、8月26～28日および9月12日～17日にスンバを訪問した。最終的にウンガ側の準備不足のため2008年における建築を諦め、その代

8) スハルト大統領を退陣に追い込んだ1998年の「改革」(reformasi)の時代以降、村レベルでも「透明な」(transparan)、「開かれた」(terbuka)というのが、政治のキーワードになっている。

わりに中核村ウंगा内の別の3棟の慣習家屋の建築を日本からの援助で進めることが決まった。

8月26日にM氏から聞いた事前情報では、ウंगा側に二つの意見があるという。一つは、死者が続いたのは、本来建てるべき「ラトゥの家」を建てずに、さらに「マカテンバの家」<sup>9)</sup>を中途半端に放置しているせいだという考えである。この考えでは、無理してでも「ラトゥの家」の建築を進めるべきという結論になる。もう一つは、「ラトゥの家」建築のためには、マンボロ、ラカワチュ、カナタンの慣習首長を招いて会議を開催しなくてはいけないし、儀礼上の手続きが面倒なので、今から建てることは無理だという考えである。「ラトゥの家」の代わりに「大きな家」というトゥラ・パライング氏族の家屋を建てるのが現実的な選択だということになる。しかし、このシナリオにも問題がある。「ラトゥの家」の場合は、中核村ウंगा全体の家屋という形で村人の動員ができるが、「大きな家」の場合は、トゥラ・パライング氏族の成員が建築の中心にならないと、あまり他の氏族の動員を当てにはできないという点である。トゥラ・パライング氏族の成員はカダハン村に数多く住んでいて、それほど多く人間が中核村ウंगाに集まるとは思えない。また、トゥラ・パライング氏族の成員を束ねる中心人物が欠けていて、それも危惧される点である。とはいえ、不確定な要素の多い「ラトゥの家」建築にいつまでもこだわり続けることは非現実的であり、この時点でとりあえず2008年は「大きな家」の建築を目指すべきだという考えになった。

8月27日に筆者は中核村ウंगाに赴き、「ルンプ・ウーラングの家」でウंगाの長老と話し合いをもった。ここで、筆者はもう準備期間が短いので「ラトゥの家」の建設は不可能であるという意見を述べた。もともと村にあった予定に従い、「大きな家」と「カリティ・アフの家」、「ルアの家」、「ボーフの家」の建築を進め、これを日本側が援助するほうが良いと主張した。これら4棟は、多少程度が違うが、主柱を立て直す必要がない改修で済む程度（4本の主柱の周りの柱を建て直す程度）の状態であるが、中核村ウंगाの会議でこの中の1棟を選んで最初から建て直し、その全工程を10月に撮影したいと要望した。

スンバに出発する前に、国立民族学博物館に関係者が集まって、解決すべき問題点について話し合っていた。とくに建築する家屋の決定と建築日程の確定が、スンバに赴く筆者への重要な課題となった。もともと村側に修理計画のある4棟の家屋の中から、日本側が重視する諸条件（家の格、撮影の被写体としての適性、その家の動員力など）を考慮し、日本側の意向を前面に出して交渉を進め、1棟を選びだす必要がある。また、日本側参加者のスンバ訪問の予定を考慮し、10月24日から確実に家屋の建築工程が始まるように手配する必要もあった。

9月12日にインドネシアに向かう飛行機の中で筆者の気持ちはいささか複雑であった。こ

9) 「マカテンバの家」にマラブを戻す儀礼（これによって家屋は本当に「マラブの家」となる）が執行されたのは、2009年9月16日のことである。「マカテンバの家」は1年半もの間、中途半端な状態で放置されていたことになる。

の「ラトゥの家」の再建プロジェクトは、実際に動き出すと、だんだん筆者の思いから離れていくように感じていた。朽ち果てた「ラトゥの家」を再建させようというプロジェクトの目的が、中途半端な「マカテンバの家」の建築という形でいったん頓挫してしまった。いったい何が悪かったのだろうか。冷静になって考えれば、「ラトゥの家」の再建という難事を中心になって進めようという強い指導者がウンガに存在しなかったということになるだろう。ウンガ村の村長にはそれだけの指導力はなく、R氏にその役割を期待したが、それも少し筆者の過大評価だった。彼は流れにのって建築を進めることはできるが、残念ながら先頭に立って統率する行動力は足らなかった。W氏は、積極的に動いて準備を進める力もっているが、やはり自分の懐を大事にしている。このような援助プロジェクトにおいて、日本側との窓口となる人がその関係を利用して何らかの利益を得ようとするのは、インドネシアではよくある話である。とはいえ、その無理を押し通すことができるような社会的地位にない人が行くと、すぐに周囲から非難を受けることとなる。W氏は自分の立場の危うさを自覚して、もっと慎重に資金の使途に注意すべきだったと思う。そのことを最初から筆者は何度も注意していたのに、W氏は使い込みの疑いをかけられてしまった。これまでの再建プロジェクトの経緯から、援助／支援がもたらす成果よりも、その実行に伴う難しさだけが鮮明になってくるのを痛感していた。

上記のような若干ペシミスティックな気持ちを抱いて、9月13日にスンバに到着した。実際にはウンガ関係者が日本側の事情に考慮を払ってくれたため、当方の予想に反して交渉は順調に進んだ。9月15日に中核村ウンガで開かれた話し合いの結果、最終的に以下のような建築計画の概略が決まった。

肝心の建築の日程については、日本側の要望を全面的に受け入れてもらうこととなった。すでに名前の挙がっていた4棟の慣習家屋の中から、完全に新築する家屋として「大きな家」と「ルアの家」が選ばれた。「大きな家」を選んだ理由は、この家がウンガのラジャ（慣習首長）が居住すべき家であり、家の格としては高いものである。この家屋の建築に際し実際上リーダーとなるH氏は、前ラジャ<sup>10)</sup>の甥（姉妹の息子）でありトゥラ・パライング氏族の女性と結婚し、婿入りの形でカダハン村に居住している人物である。前ラジャの父系子孫ではないが、経済力と影響力をもっていて、建築に必要な数の労働力を集める力を有している。また、H氏は、現在の支柱をすべて取り替え、現在よりも少し高くして、より大きな家を建てようとして計画している。この点でも、撮影対象にふさわしい家屋が選ばれたことになる。「大きな家」の建築の準備段階として、9月26日に森に入って、4本の支柱などの伐採を始め、10月12日には木曳を開始することになった。とはいえ、10月15日に最初にウンガに入る佐藤氏の到着を待って、歌で迎えながら支柱が村に入るという段取りが決定した。

もう1棟の「ルアの家」については、すでに森に入って柱用の木材（支柱以外の柱）を伐

10) 前ラジャは実子をもたずに亡くなった。明確な後継者は存在しなかったため、現在ウンガにラジャと呼ばれる人物は存在しない。

っており、確実に建築過程を記録に収めることが可能である。また、村全体の労働力を動員するためにも、1棟の家屋の建築にだけ援助するのではなく、別の家屋の建築にも援助することで、村全体の共同作業（インドネシア語で Gotong Royong）という形になり、労働力の確保が容易になると考えた。残りの「カリティ・アフの家」と「ボーフの家」については、その内の1戸についても、費用の一部を援助することとなった。

このようにして、2008年10月にウンガ村の慣習家屋再建とその工程の撮影が実現する運びとなったのである。

## お わ り に

今回の報告では、2008年10月に日本側の援助によって中核村ウンガで4棟の慣習家屋を再建することになった経緯について明らかにした。実際の建築の詳細については続きの報告で取り上げたい。

援助する側＝日本側と援助を受ける側＝ウンガ側とのやり取りを今回は紹介した。ここで鮮明になった問題点は、本プロジェクト固有の事情によるものというより、日本とインドネシアの文化的交流を日本側のイニシアティブで進めるにあたって、起こりがちなことだと考えられる。第一に、日本側には日本の事情があり、インドネシア側にはインドネシアの事情があるという当たり前の事実である。日本側は自分たちの都合を無理やりインドネシア側に押し付けるべきではないということは十分に自覚している。とくに今回のプロジェクトには、人類学者が参加している以上、日本の「常識」を無理に押し付けるような援助プロジェクトの弊害は否というほど分かっている。しかしながら、場合によっては、日本とインドネシアの「交流」の現場で、多少なりとも調整が必要になってくる。たとえば、年度という予算使用の制限があるケースでは、インドネシア側（正確に言えば、対象となる地域社会）にある程度は、日本側の時間的都合に合わせて、動いてもらいたいと要望するようになる。また、スンバのウンガ社会のように、宗教（祖先崇拜）と慣習が不可分な関係にある社会で慣習家屋の再建を進める場合、当初の予想を超えるような問題（老人の死去をめぐる災因論）が発生することも十分に考慮に入れて、家屋再建にむけて支援を計画しなくてはいけないことになる。

第二に、援助／支援という名の下に日本側からインドネシア側にお金が動くことによって、インドネシア側で、そのお金をめぐって疑いが生まれ、その挙句に援助される側の地域社会に争いをもたらす結果となることがある。地域社会を支えるという目的の支援が、結果としてマイナスに働くことになる。援助金の使途に関する透明な会計報告を第一原則に掲げるにせよ、それがまだ当たり前となっていない地域社会では、それを実現に移すのは一筋縄で行く話ではない。

本報告では、問題点に重点をおいてプロジェクトの経緯をまとめることとなったが、次回の報告では、プロジェクトの成果を中心に取り上げたい。

## 参 照 文 献

- 小池誠, 1989, 「イエとムラ——インドネシア・東スンバ社会におけるイデオロギーと現実」『民族学研究』54-2: 137-165。
- , 1990, 「中核村ウンガの「大祭」をめぐって——1986年, インドネシア・東スンバ」『アジア・アフリカ言語文化研究』39: 135-161。
- , 2005, 『東インドネシアの家社会——スンバの親族と儀礼』晃洋書房。
- Badan Pusat Statistik Kab. Sumba Timur 2003, *Sumba Timur dalam Angka 2002*, Waingapu: Badan Pusat Statistik Kab. Sumba Timur.
- Badan Pusat Statistik Kab. Sumba Timur, 2005, *Haharu dalam Angka 2004*, Waingapu: Badan Pusat Statistik Kab. Sumba Timur.
- Kantor Statistik Kab. Sumba Timur 1987, *Sumba Timur dalam Angka 1986*, Waingapu: Kantor Statistik Kab. Sumba Timur.
- Kantor Statistik Kab. Sumba Timur, 1989, *Sumba Timur dalam Angka 1988*, Waingapu: Kantor Statistik Kab. Sumba Timur.
- Sub Direktorat Statistik Demografi, 2006a, *Penduduk Provinsi Jawa Barat: Hasil Sensus Penduduk Antar Sensus 2005*, Jakarta: Badan Pusat Statistik.
- Sub Direktorat Statistik Demografi, 2006b, *Penduduk Provinsi Nusa Tenggara Timur: Hasil Sensus Penduduk Antar Sensus 2005*, Jakarta: Badan Pusat Statistik.

Building Houses in Sumba :  
A Report on a Project for Developing Cultural  
Cooperation between Japan and Indonesia (1)

Makoto KOIKE

The purpose of this paper is to report the activities of the “Rebuilding Ancestral Houses Project” that we carried out in the ancestral village of Wunga (Parai Wunga) on the island of Sumba, Indonesia. This is the first half of the full report that depicts the cultural and social background of the ancestral houses (*uma marapu*) and reports progress in the rebuilding of Uma Makatempa (the House of Collection) in Wunga. The project was formed jointly by Momoyama Gakuin University, the National Museum of Ethnology and Takenaka Carpentry Tools Museum. Also, this is a part of “the Project for Developing Cultural Cooperation between Japan and Indonesia” funded by the Research Institute of Momoyama Gakuin University.

The main aim of the project is to help the villagers rebuild Uma Ratu (the Priest’s House) which is the most sacred and dignified house in Wunga. It is necessary to support them because they are so impoverished that they cannot rebuild it by themselves. Also, we are convinced that the necessary skill and knowledge for building it will vanish unless we start the project immediately. In March, 2008 they began to restore Uma Makatempa, the venue for the meeting that precedes work on Uma Ratu. Thereafter they suddenly stopped their preparations for rebuilding Uma Ratu because of some obstacles they had encountered such as the death of two elders in Wunga. After hearing our request, instead of Uma Ratu they decided to rebuild four ancestral houses in October, 2008, allowing our staff to film the procedures to make ethnographic documentaries.

Throughout our program we faced two problems, which may arise in most aid projects. First, it was difficult to attain our main objective while taking the local requirements into account. Second, the funding we provide may cause troubles among the local society we would like to support. To avoid creating such problems, we should demand transparency of accounting from the donee side.